



けが、早くきれいに治したい！

～創傷治癒の常識？非常識？～

はじめに

皆さんは傷に対してどのような治療をしていますか？傷口につばをつけたり、赤チンキを塗って乾かして、日光に当てて治している人はさすがに少なくなりました。多くの人は消毒してガーゼを当てる、傷は濡らさないという意見でしょう。

しかし、最近推奨されている治療は従来行われてきた消毒薬とガーゼを用いた方法から、洗浄（傷を水道水等で洗うこと）と被覆材（ひふくざい、傷を覆う材料）による方法に変わってきています。

なぜ傷に消毒はいけないのか

最近では、傷は消毒してはいけないという事が常識となりつつあります。なぜでしょうか？

それは、「傷を消毒するとかえって治りが悪くなる」からです。実は、消毒液に含まれる殺菌成分は、雑菌を死滅させるだけでなく、肉芽組織（傷表面の皮膚形成を助ける細胞）までも殺してしまうのです。また、綿球などでゴシゴシとこするような刺激も肉芽組織を損傷します。このため、傷を消毒するとかえって傷めてしまうのです。傷に菌の感染が広がらないのは消毒のおかげではなく、傷周囲の血液循环や自己免疫力や抗生物質によるところが大きいのです。

消毒は傷の治癒や治療には効果がありません。

ガーゼを使用しない理由

傷にガーゼを当てるのもずっと当たり前と思われてきました。けがをすると傷から出血し、固まって痂皮（かひ、かさぶたのこと）をつくります。傷からの血液や体液を吸い取るためにガーゼを当てますが、ガーゼに吸い取られた血液や体液は乾燥してガーゼが貼りつきます。傷口から分泌される各種の「細胞成長因子」を吸い取って蒸発させ、細胞成長因子が傷口に働くのを妨害します。そしてガーゼを取りかえるたびに痛みがあり、再び出血したりしていました。そのため治りかけた傷をさらに悪化させます。傷を治すには

皮膚の細胞を増やす必要があるのに、皮膚の細胞は乾いて死んでしまっていたのです。

乾かさない治療（湿潤療法）

湿潤療法（モイストヒーリング・うるおい療法・閉鎖療法）とは傷を乾かさず、程よい湿潤環境にして治療をしていく方法です。湿潤療法の一番のメリットは『痛くない』ことです。消毒や乾燥をさせないため、治療時に患部の痛みを軽減させます。この他にも湿潤療法には治り方が綺麗で速いことがメリットとして挙げられます。

そこで傷を乾燥させない湿潤状態をつくって傷を覆う被覆材が開発されてきました。湿潤状態では細胞は生き生きと増え、けがでえぐれた部分も皮膚で覆われていきます。以前は、湿潤環境が良いものとわかっていても、それをうまく実現出来ませんでした。現在は比較的安価な創傷被覆材が発売されています。人工の『かさぶた』です。かさぶた（医学用語では、『痂皮』と言います）の下の環境が、創傷治癒にとっても良かったのです。

すり傷や切り傷では、止血効果のある被覆材で止血した後に、しみ出てくる体液を乾かさなような被覆材を貼りましょう。

まとめ

1. 傷は消毒しない、こすらない。
2. 創部を清潔に保つ。
(水道水等で洗浄し、汚れを落とす。)
3. 創部を湿潤環境に保つ。
(各種フィルムや被覆剤を使用する。)

－筆者紹介－

びぜん あつし
備前 篤

1975 年生。東京都出身。

2000 年 東海大学医学部卒業。

東海大学医学部外科学系形成外科学 助教。

附属大磯病院 形成外科所属。

所属学会：日本形成外科学会、日本レーザー医学会